１９２５年（大正14年）〔21歳〕
「辰雄日誌１９２５」No. 6 （5）
――１９２５年5月1～31日――

小池辰雄

○１９２５年5月1日（金）

晴。……〔James Buckham の詩の引用省略〕……。

5月は来た。春の最中（まなか）である。若き、元気に満ち満ちて、希望の空に舞い上れ。かの雲雀（ひばり）の昇天する如く。夕方、三弦さん、千鶴代さん、隆ちゃんと皆で散歩をした。半月が麗しの春の空にかかっていた。何と春らしい夜ではないか。

高校の周囲を一周して帰って来たのは7時であった。宣ちゃんが8時半頃、来られた。9時！　それは僕の夜の祈りの時である。いかなるときもこれをはずすことは出来ない。人のために、神とのお話をしないでいることは到底出来ぬことである。神様は、僕を呼び給う。僕が呼ぶんではない。我が神は我が父なる神である。彼は主にして、私は従うところの僕である。御父なる神よ、願わくは、お父様の最もよろこび給う兒等の一人となさしめ給え。御子キリストの愛によりて私は救われたり。願わくはキリストの昔あり今あり永久（とこしえ）にあるが如く、私もまた永久に易（かわ）ることなくキリストの許に聖なる都の一人とならしめ給え。我が望みはただこれにのみあり。

「19 **我は神に生きんために、律法によりて律法に死にたり。20 我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉體に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信ずるに由りて生くるなり。」（ガラテヤ2・19～20）〔独文〕**

アーメン。誠に誠に今日は僕の人生のWendepunkt〔転換点〕である。重大なる時機である。これほど重大な時機は、未だかつてなかったのである。そして、ないのである。１９２３年の春より3年の間は。これ誠に。この頃また更に。キリスト来り迎え給う日まで。

神よ、我に苦杯を与え給え。我は、あまりに主の僕としてはふさわしからざりしものなりき。神よ、我は身が砕けるとも、主のために、人生を真面目に勉励して地上のつとめをはたさんとするものでございます。決して己れの努力、力によるにあらで、神の与え給う御力によりて。主の御力は、実に人々の知らざる偉大なるものでございますことを知ります。それは小生を誠にerwachsen〔成人する〕せしめ、lebendich〔生き生きと〕ならしめ、はたらかざればおらざるものとなさしめ給うものでございます。

願望は、この与え給うところの貴き毎日々々を堅実に歩ましめ給え。我今日、色々の妨

げありまして、未だ聖書を読まず、これから読まざれば寝ることの出来ぬものでございます。神様に対してそれは出来ぬことでございます。故に読ましめ給いて、お導きあり給え。しかして、安けき眠を与え給え。

ローマ書第1章を、ルッターの独訳聖書を以て読み始めんと致します。而して、今月中にローマ書全部を読ましめ給え。ああ、いかに有難き日々なることよ。5月よ、汝に祝福あれかし。アーメン。

○1925年5月2日（土）

晴。はじめて春らしい天気になった。暑いと云っていいくらい急に暖かくなった。春眠不覚暁（あかつきをおぼえず）のときが来た。よく眠り、しかしてよく働かぬ、なんとなまけものだろう。宣ちゃん昨夜来訪。今日午前11時から卒業生と在校生と諸先生も勿論、第1回同窓会聯合大会が催されて、卒業生との親睦、連絡の鎖をかたく結んだ。熱弁あり。吾人青年の意気、堂に満ちた。バスケットボールの対卒業生の仕合は水高在校生の大勝。フットボールも4対0で勝つ。青木の叔母様来水。

時は移る。人は変わる。万物は流転す。栄枯盛衰す。変わらざるものあり。ただ一つあり。主イエス・キリストの愛なり、生命なり、十字架なり。神、エホバよ、易らざるお父様よ。愛の父、キリストの十字架、復活、昇天、再臨。見えざるいと貴きものよ。我信ず、我永遠に御許に生くるものなるを。聖国よ来らせ給え。アーメン。

○1925年5月3日（日）

雨。安息日はこの頃、雨天と定まっている。神は、安けき静かなる日を与え給う。午前の2時間はいとも感謝である。しかして一日が、いとも沙漠の沃地である。すべての働きをわすれて、神のことのために、神の国のために考え、学ばせて戴く。神様は小さき僕の室に来り給う。愛する聖徒は天使の翼をもって飛び来（きた）る。パウロ来れり、ルッター来れり、高島伯母様来れり、兄上来れり。彼等、語り、教え、励まし、慰めて、讃美の音楽を奏して、またのぼりぬ。ローマ書と共に。はるかに藤井先生のお祈りに従いて。

人々よ、何故、汝等は聖日に勝手な自らの仕事、娯楽をなすや。汝等はこの感謝すべき与えられたる日を知らざるか。愚なる子等よ、父のうれいなり！　6日をよく働け、而して来る7日目には、よく休みて神の御許に近く侍りて、御光にのみ浴せぬや。現世的々々々となりゆく人々の破滅よ。人類は自己滅落の道をたどる。速（と）く神に帰りて、神の愛に浴せよ。しかして、我等に愛の生命保たるるなり。神を真剣に仰ぐことなくして、愛もなし、生命もなし。

パウロ最後の牢獄に在り。ルカ彼を訪（おとな）う。パウロ口開く、「我信仰のよき戦を……」と。その Ölgemälde〔油絵〕は我が机の左の壁にかかる。我、彼を忍ぶ。絶大の力、彼より注

ぎ来る。彼の衷にキリストの絶大言うべからざる力あり。蓋し、我に注ぎ来るはそれなり。正に彼の愛なり、愛即ち力なり。愛と力とはキリストに在りて一体なり。ルッター、机上の額中に在り。偉大なる体躯と光る眼光。彼れパウロと此れルッター。かかる良友、我が小室に生きて在ると知りて、我は何ものを以ても換えるあたわざるものを有てるなり。我はあくまでも神より戴けるもののうちで最も美わしき貴きもの、霊に生きんものなり。かくて、すべてのもの我が有なり。永生あり、信ず、聖国あり。感謝。栄光限りなく神にあれ。ハレルヤ、アーメン。

母上、武田の叔母上に書簡を認む。宣ちゃんを水戸駅に送る。雨としたしむ。青木の叔母上、昨日来れる。

○1925年5月4日（月）

雨後晴。……〔独文省略〕……。

断然かくあるべきは我が今日のつとめなりと信ず。時間の浪費、怠惰は罪悪なりと信ず。我が誠心、"Ya!" "Danke!"〔はい！ありがとう！〕と云う。語、句、文、詩を机上にかきてよく憶えんとす。これ誠によき伴侶たらん。強健なる信仰をあたえられてよく働ける。これに勝る幸福はない。

夜、青木の叔母様、三弦さん、千鶴代さん、隆ちゃんと皆で公園に散歩に行った。誰も居なかった。月は春霞を通してやわらかく照っていた。汽車が通って音は消えさる。また寂寞に帰る。持参のお菓子いただいた。チマキで夜節句のお祝いというわけだった。肝腎の隆ちゃん、眠っていた。うばぐるま Kinderwagen の中で。涼しすぎる位であった。よき散歩であった。

芳賀の居た席（教室）が今の僕の席であることを知った。どういう因縁だろう。窓側から2列目の先頭。然り、彼に劣らず勉強してやる。我！　選ばれたるもの何ぞ凡にてあるべけんやである。

○1925年5月5日（火）

晴。節句。晩春、そろそろ初夏といいたい位な時候になった。夏服が次第に数を益し、今日は著しく増えていた。汝思い煩うこと勿れ。来りて来るその一日一日を。最も忠実に送るものたればそれにて万事は解決されているのである。万事は善に向かっているのである。絶対信頼のその日くらしの外に我に生くるすべなしである。何を人言に動かさるるや。

Wenn dein Gewissen rein ist, so kannst du der Verleumdung trotzen.

〔良心にやましいことがないなら、君は中傷に対抗できる〕

Morgen, morgen, nur nicht heute, sprechen alle faulen Leute.

〔明日、明日、今日だけではないと、みな怠け者は言う〕

我に母あり。その母は愛の母なり、奮闘の母なりき。
我に兄ありき。その兄は信仰、純真の兄なりき、絶倫の兄なりき。
我に兄あり。その兄は、堅実、忠実、不動の兄なり。孜々（しし）として営む兄なり。寡言（かげん）実行の兄なり。
我に姉あり。優しき健康の姉なり。心に真心ありて我を愛す。
何故に汝のみ、不信、愚鈍、薄志弱行、無根気、不統一、気まぐれにてあるや。
何故、自家撞着、矛盾のかくも多くあるよ。ああ、我なやめる人よ。汝は将来何になるんだ。虻蜂（あぶはち）とらずのろくでなしになるのか。不信と愚鈍と怠惰によりて万人に蹴られる人となるのか。汝は名誉がほしいか、社会的地位が得たいか、人の評判がいいか、財産を作りて、安楽な生活をしたいか。美食、娯楽、悠遊（ゆうゆう）の慾を肆（ほしいまま）にしたいか。汝の道は二つの一なり。両者に兼ねること能わざるは明々白々のことなり。これ動かすべからざる真理なり。岐路なり、岐路なり。
左せんか右せんか。汝の肉、汝の旧き人、汝に宿る悪魔に従いてその道に進まんか。汝は、現世に於て歓迎さるべし。
然れども、汝の霊、汝の新しき人、汝に宿る聖霊に導かれて進まんか。その道は、いと辛し、雨あり、いばらあり、嵐あり、雪あり、石あり、沙漠あり。飢えることあらん、餓えることあらん。あらゆる現世に絶対なる困難なる事はともなわん。しかれども、見えざるもの常に汝にあり。それは生命の光なり、泉なり。その道は現世に肉のある間は十字架をさすのみの道ならん。しかれども十字架のかなたを見よ。十字架の後の光を見よ、それは到底、現世の歓楽、一時的の歓楽、幸福にくらぶべきものにあらざるなり。それは信仰、ああ、ただ信仰によりてのみ明々白々なる事実なり。
然り、我はこの道に進まん。この道をあゆまん。あらゆる苦杯、これ基督者の覚悟の上のものなり。これむしろ歓ばしきことなり。人の思いに過ぎる平安は、この艱苦の中にあるとは何と深き聖旨にあらずや、恩寵にあらずや。然り、我は孜々勉励、この一身以て神のため、人霊救済のためにささげんものなり。
神よ、願わくは、苦しき勉強をなさしめ給え。苦杯を賜え。
神よ、我が母上と兄上とを毎日々々我が心に憶えしめ給え。
我が鞭（むち）、我が生命への指南の星なればなり。
神よ、願わくは、「急がずに休まずに」を以て孜々として勉めしめ給え。
神よ、畏れておたずね申す。我は独文科を志望したいのでございますが、おゆるし下さいますか。
然り！　汝が日夜、孜々勉励せばゆるす。神様のお答えはかくある如く我にひびく。
神よ、信仰によりて神の命に従い、神の御業のために我が道はむしろこの方面に向くの心地いたします故に。我が実力は一つ神の必ず賜うなるを確信いたしまして、日夜勉励い

たします。願わくは、苦杯をのみつつ、信仰により真剣の勉強をなさしめ給え。アーメン。

○1925年5月6日（水）

晴。我が願い、夢に現われたるは、何と不思議か、当然か。我知らず、神ぞ知る。

芳賀、夢に現われて、我に語りて言う。はじめ、なかば、の語は忘れたれども、目覚めんとする刹那（せつな）、彼最後の語を残して消えたり、曰く、

「間際になってあわてても駄目だから今からしっかりやり給え。もう5月だもん」

と言い残して。誠に我に相応しき言である。これ平生の我が欠点を指摘した適言である。しかり、間際になってあわてがちなのが僕の常である。時間があるあると思っているうちに、なくなって悔ゆるは日々よく経験するところである。

何度、草履が無くなったか。無断に人のものを持って行くのが高校生の癖である。彼等は共産の思想を悪用しているのか。良心が悪習慣に麻痺しているのか。何れにしろ、悪事なることはたしかである。汝等は「盗む者」である。この間買いし草履は今日すでにない。かつては、インク、万年筆、傘と紛失したこと屢々（しばしば）である。不道徳である。小学校にはこんなことはない。しからば高校生は小学生よりも不純なこと疑なしである。ああ。知育、教育、徳育とは何ぞ。

神よ、聖旨ならば我に頑強なる身体を与え給え。我既に罪に陥りて、病を得て、神の器を害せしこと甚だしかりき。今は悔ゆること深し。願わくは、あわれみたまえ。我信ず、神見棄て給わざるを。我、重ねて願い奉る。我に更に頑強なる身体をたまえ。今は健康体なり。深く感謝す。我聖旨に従いて、節制、鍛練して、健強にならんことを願う。もし聖旨ならば、我を5尺5寸〔166.65㎝〕、15貫〔56.25kg〕の身体となさしめ給え。我、節制し、鍛練せん。しかして結果は聖旨ならば。アーメン。

……〔Robert Southey の Thalaba の詩省略〕……。

10時頃、戸外、玲瓏（れいろう）なる月を仰ぎて。また星を瞻（み）て。人の眼も何光年なるかを知らざる星を見得ると思えば、不思議でたまらぬ。万事神秘ならざるはなし。全宇宙の真相を知るもの一人だにあることなし。然れども一全能の神在（い）まし給いて万物万事を統（す）べ給う。我之を信ず。我等彼により造られたり。人生何ぞや。朝霧の如きか。然り、小さく弱き我々の眼にはしか思わる。然れども、神は愛なり。棄て給わざる神なり。故に、すべてを彼に委ねて、我安し、豊かなり、生命に溢るるなり。ああ、人生は、不信なるとき最も悲惨ならざるを得ず。誠に人生は、信仰によりてのみ、愛に満つ、栄光に満つ。神は愛なればなり。

ああ、哲学とは何ぞ。科学とは何ぞ。はたまた神学とは何ぞ。

ただ神にすがるの心のみ人を人となすなり。

神よ！　誠にかく信ず！　救い給え！　アーメン！

哲人曰えるあり、“cogito ergo sum”〔我思う故に我在り〕
我曰わん、〝我信ず故に我在り〟と。
更に言わん、〝神在まし給う、故に我在り〟と。
ここに至りて、内村先生の句を思い出した。
「円満無謬の哲理にあらず、森厳偉大の教義に非ず、山なすばかりの富に非ず、誘う
美の力に非ず、また鋭利の筆に非ず。人なり。」
ああ、ついにイエス・キリストに従わざれば死のみ。
主よ！　これらの不遜の思いをとりけし給え。
願わくは、主の忠実なる僕たらため給え。
願わくは、主のよろこび給う子とならしめ給え。アーメン。

○1925年5月7日（木）

晴。小牧先生お休みで1時間目なし。グンデルト先生のウィルヘルム・テルはだんだん佳境に入って来た。泰ちゃんは今年、山県高校へ入学した。彼のためによろこぶ。彼の「眠られぬ病」が癒らんことを祈る。ヒルティーの『眠られぬ夜のために』の精神、……それはキリスト教である。彼に基督教が入れば、信仰が起これば、忽然としてそれは癒えるのである。

○1925年5月8日（金）

雨。哲学の先生、山田教授は面白い。哲学も面白い。人生問題である故に興味がある。Das Ganze〔全体〕と云う語や、Wendepunkt〔転換点〕など云う語はよく出てくるが、今の僕の心はこれらの語を解するに誠に容易に向かわれている。と云うのは、経験、実感のひしと思いあたるものがあるからである。さて哲学と宗教。哲学の運命も大体察せられる気がする。ああ宗教。無限、無測の宇宙。小智小能の人。誠に問題は容易でない。面白い。しかし厳粛である、真面目である。

霊的生物なる人、彼はついに物質論に属して物質のStoff〔質料〕なるものに支配されて満足なるものかしら。人生の解決、宇宙の解決の鍵はStoffかしら。ああもし然らば人生とは何ぞ。人とはなんぞ。神とは何ぞ。我々が人間として宇宙に存在する以上、我々が生きている以上――ここに「我思う考う故に我在り」と云うよりも「我思う故に我生く」と云いたい、更に信仰的に「我信ず故に我生く」と云わねばならぬ――我々は我々の生命（イノチ）を全うせんために霊的ならざるべからず。即ち生の力は信仰より外に大なるはないのである。人間、無信に堕落し行くときに人類は滅亡である。信仰あるときに人類は永遠（とこしなえ）に存す。

これ神の人類に要求し給うの道である。然らば信仰は何ぞや。これを証明し説明することは不可能である。何となれば、信仰は最大最高のものなるが故である。如何なる峻烈な

問も信仰を屈服せしむることは出来ぬ。むしろ問そのものが信仰の前に屈服してしまうのである。信仰は人類の最も重要な所有物なる霊の自らの実験、体験、経験によってのみ得られる故に、之最大最高なることうたがいを容れざるものである。これより大にして強なる信念はなし。感謝なるかな。アーメン。

幸なるかな、とエホバ宣い給う。このことをしるす今は10日、夜の12時半をまわったときである。ごたごたして日記をつけわすれて今日ここに記すわけである。以て、哲学の一時間の授業に対する我が宗教上の信仰、そしてまた、人生問題の根本を私見ではあるが、不完全ではあるが、神よりの黙示の一端――普通の私見じゃあない――なる故にここに明かにしたいのである。

○1925年5月9日（土）〔記載なし〕

○1925年5月10日（日）

晴、夜雨。佳節、御銀婚式〔大正天皇〕。午前9時、出掛けた。やや曇っている。藤井先生のお宅へ参上、今日は第4回目である。また一番先についた。お集まりに来られた方、帝大医科の方、慶大医科の方、どなたか学生、高木八尺様、一老人、女学生の方、塚本様と云う婦人、一婦人、学生4人、先生を数えて13人であった。名前はすっかり忘れてしまった。一寸うかがったけれども。ダンテとルッターの額が掲(か)けられてあった。10時半から始まった。家から先生のところまでは1時間と少しで行く。

讃美歌215「ちとせのいわよ」を以て神へのお願いはなされた。先生のお祈りは誠に有難くアーメンを以て従った。何と深く感じたことであろう。聖書は旧約エレミヤ記第8章第18節、

「嗚呼われ憂う如何にして慰藉(なぐさめ)をえんや我衷(わがうち)の心なやむ。……」

から9章2節までで、エレミヤの概括的研究であった。聖書朗読後の讃美歌は223「いつくしみふかき」であった。エレミヤについて先生の言われたことを書きたいが、時間をもたない。ただ、単語の羅列を以て、彼をつよく思う。

エレミヤ、偉大なる預言者。彼は天性 Feeble〔弱い〕な人、Sensible〔賢明な〕な人であった。かよわく、感受性に富んでいる故に、到底、所謂自己の意志で立つような人でなかった。神は鈍く信頼すべきものを要した。彼にこれありしにより、彼は堅忍の人、迫害患難に対して屈せざる人であった。彼は delicate〔繊細な〕なりし故に敏感にして、penetration〔洞察力〕に富み、事物の表面にあらず、その真相を洞察し、また先見ある、預言者のうちにても大なる者であった。偉大なる預言者エレミヤは、また、熱烈なる愛国者であった。彼は憂国のあまり、言、極にすぎ、否、極ならざるを得ぬのである。迫害艱難は身にあくまでも襲うて来た。かよわき人、憂愁の人、しかして彼はかえって選ばれた人であった。彼の

生涯は深く我々基督者に照らして考えなければならない。エレミヤは、最も慕わしき人と感ぜられた。先生のお話によりて本当に有難いものを戴いた。僕には本当に強く来た。讃美歌301「汝等はキリストの者、キリストは神のもの」は、初めてであったが、いい讃美歌である。今日は本当に有難い聖日であった。

帰りに、はからずも高木八尺様とお話しすることになり、電車の中でお話ししているうちに、亡き兄上は「ヤスサン」と云って居られた方がこの方であることがわかり、急に懐かしき旧友（先輩ではあるが）の感がした。ことに高木さんの人格には敬服するところがあった。立派な基督者ほどゆかしい者はない。高島さんのところへ行くのでまた、はからずも御一緒になった。八木様のお家でお昼の御馳走になった。八尺様と二人でいただいた。二階のお客間で。かよ子様も居られた。かず子様は3月20日のお生まれとうかがった。

ラジオ劇その他2、3を聞いた。この頃はラジオの放送盛んとなって来た。

さて、思う。僕は、不信と愚鈍を断然脱した生活をおくらねばついに最もあわれむべき人間となってしまうことを。そして信仰の生活の中の一部にあるべきことは、毎日、コツコツと読書することである。ことに独逸語は、いつか書いた様に10頁は読むことである。大体に於て実行されたがまだ完全でない。本当に冗談ではない。あまり愚鈍遅鈍怠惰であった。むらなく着々と、孜々（しし）と勉励せざるべからず。我が一生はこれよりの大多忙なり。苦しめ苦しめ、我は苦しまざれば救われざる人間である。なやまざれば救われざる人間である。尋常のことでは駄目である。必ず一大奮闘を要する。これは何よりも明らかなことである。

神様、願わくは、あなたの賜う――いと小さき私に――課せられる御使命にそむき、おこたることなき、忠実なる勉励する僕（しもべ）たらしめ給え。また兎角、ものの切迫するまで、ぐずぐずしている私を、備えあるものとなさしめ給え。

○1925年5月11日（月）

晴。昨夜雨だったので、今日の天気はどうかと思っていたが、幸に光かがやく朝であった。僕のすきな白ソースやとろろの御馳走になった。例によって、鞄（かばん）は本で一杯になった。ことに聖書辞典があったため重くなった。……〔洋書名省略〕を持って来た。

午後4時35分の列車で帰水。車中、武井一雄君と一緒。眠ったり、読書した。談話したりして。日没を利根川を渡ることを望んだ。大自然の景、宇宙の動き見る。我が心、詩的ならざるを得ず。やがて春の星々が浮かんで来た。人と生まれて美しき自然をよそにして前や横や下をのみ見て歩く人は哀れむべき哉とまた感じた。

Reclam〔ドイツのレクラム出版社の本〕を数冊、兄上の本箱から引き出して来た。英語第一語学に居ながら、これほど読んだか思うと、兄上の精力絶倫と勉励におどろき且つ我が身の如何に恥ずべきかを感じた。ここに於て益々努めざるべからずであることを痛感する。実行乏しきあわれむべき我、奮起せよ。汝はかくあるべき身にあらず、重大なる身なり。

「兄は何故に先だちしかを思え。汝は何故に残され居るかを思え」

車中読みし書は『ファウスト』新渡戸先生著の序文と始めの方である。ゲーテは天才ばかりでない。彼は絶倫の精力を有っていたばかりでない。彼もまた普通人の如きところがあった。彼は大努力勉励の人であった。「休まず急がず」歩みし人であった。故に彼はあの様な大著をなした。偉人の勤労を幾分なりとも我が身に体験せざるべからず。

我に誡めあり。毎日着々となすこと。Constantly〔いつも〕、Steadily〔着実に〕。精力集中すること。Concentration〔精神集中〕。しかして、敏速（Schnell）と堅忍（Geduld）とを忘れてはならぬ。

午後8時半、青木のお家へ着く。一寸お話しする。就床11時。

近頃の日常生活は次の如くである（大体）。

A.M. 6:30　起床、冷水摩擦、掃除一寸、（7:00になりがちである）。

A.M. 7:00～8:00、Morning Prayer〔朝の祈り〕、Bibel〔聖書〕主としてPsalm〔詩篇〕、Daily strength for Daily Needs〔日々の必要のための日々の強さ〕

昼食、帰宅、新聞。運動。

P.M. 4:30～8:00、Exercise & Preparation〔練習と予習〕、夕食後、Hymns〔讃美歌〕in Heart

P.M. 8:00～9:00、Deutsh（主）od. English

P.M. 9:00、Night Prayer〔夜の祈り〕（如何なることがあっても、9時の鳴ると共に）。Bibleと宗教書類。Letter & Diary〔書簡と日記〕

P.M. 10:30 Go to bed.〔就床〕

誠にBibel, Psalm, Hymnsなくして我は一日たりともすごすあたわず。神とのおちついたお話しなくして、我は淋しくてたまらぬのである。人との談話は長ければ長いだけ我をさびしくするものであるらしい。

○1925年5月12日（火）

晴。高木八尺様へ御手紙を認めた。

池の上の　花は昇りて　星と輝く。
　み空にありて

と詠った（勿論拙くあるが）。高島の伯母様のために。The Table Talk of Martin Luther〔マルチン・ルッターの卓上語録〕を5章宛（ずつ）読むことにした。849章だから、170日かかる。半年で読める。丁度、今年中に読み上げる。大きい兄さんが夜、同心町で床の中に入ってから毎晩、毎晩、讃美歌を一宛おぼえて居られるのを今思い出した。実に多忙の中に、時間をよくつかっておられた。Hilty〔ヒルティー〕のEin Kunst, Zeit zu haben〔時間を有つ術〕を実行されたのは兄だった。僕も倣（なら）わねば駄目だ。忙しい中に休息あり、愉快ありである。

P.M.9:00 Oh! Sacred minutes!〔午後9時、ああ！聖なる瞬間！〕短針と長針とは厳かなる直角をなし、一つは水平線上遠くまで指し、一つは高く天を指すのとき。一日に最も聖なる厳かなる数分である。いかなる日も之を忘るるあたわず。

○1925年5月13日（水）

晴。愛読書 Für Schlaflose Nächte〔眠られぬ夜のために〕より、……〔独文省略〕……。

武田の叔母様へこの頃の歓びの呼(さけ)びを放つ。忙しくてたまらない、もう死にものぐるいはたらくつもりだ。神様は我がこと畢(おわ)るまでは我を斃(たお)れしめ給わない。

「その時来らばおそれなく御手にひかれつつ天に昇りゆかん」

である故に、感謝と歓喜と溌剌である。

○1925年5月14日（木）

晴。よくもおまえはなまけたもんだ。すぎにし20年に、おまえが本当に勉強したのは、中学入学の前1年間と、高等学校入学前の1年間。合わせて2年間にすぎない。でもこの智慧さえ智慧ではない。おまえは未だ智慧の赤子だ。ちょっとイロハをおぼえた赤ん坊だ。おまえの頭脳はまだ新しい、生き生きしている。知識を容れるにたっぷりだ。どんどん入れろ、とり入れろ。おまえのあたまが満ちるまで。知識が満ちると、神様は、おまえによろしいと仰って、この肉体をすてることを命じ給う。その知識は蓄えられているだけじゃ、くさってしまうおそれがある。いつもいつも間断なく使って、とり入れるんだ。その智慧はただの智ではいけない。いつも生命をもたらすものを。

さて、三畳の小室には良書が一杯で僕を囲んでいる。読んで読んで読み破れ。のろいぞのろいぞ、どんどんと。一通りのことでは、おまえはすまない人間であることを自覚せよ。

ああ、信仰なき人々よ。よくあなた方はそうやって生きていらっしゃる。僕は、今の僕はむしろこれに驚く。僕にあっては、哲学も芸術も音楽も学問も、なんでもかでもみんな神あっての上の話だ。神なくして、これらのことすべて空である、幻である。悲哀の種である。ああ、人々よ、よくあなた方はそれで生きている。ああ、各、自己に強き現代の人々よ。ああ、我があわれむべき人なるか、我が時代おくれの人なるか。知らず。然れども、粛然として神の御前に祈るとき、神、絶大の愛の御力を注ぎ給いて、これらの万人、いかに我を責むるとも、なんとしようとも、竟に動かすべからざるの確信あり、歓喜あり、感謝あり。アーメン。〔花瓶にさしたスズラン（?）のスケッチあり。千鶴代さんより The Lily of the Valley〕

○1925年5月15日（金）

雨。終日雨。友、松濤誠廉と共に帰り、一寸彼を我が室にて話す。彼、父を失えり。彼のために悼むと共に、彼もまたこの打撃によりて、更に深くなりつつあるならば、彼のた

めに喜ぶものである。彼は印度哲学科に入らんとす。

友よ、真面目なる友よ、汝もまた人生を真面目に過ごさんとするものなり。汝もまた人生のために苦しむものなり。然れども、我をしてすこし論ずるをゆるさしめば――誠に我にかく云う資格はなかんらも――若し汝が哲学に、或は印度の宗教に、人生の光と力と歓びと感謝を即ちその源泉をなす神の愛、愛を求めんとするならば、それは竟に失敗に終りはしないかしら。そのために我は泣く。或は、印度哲学は宗教味に富み、完全なものかも知れない。しかし、我が体験するところのこの力、日々の生活そのものに人生の最大の目的の得られるこの歓びは果たしてかの哲学というもののなかに得られるだろうか。汝がもし明智深遠厳正なる人生の探求家たらんとならば、我は単純なる罪に泣く信仰信頼の人にて可なり。

真面目なる友は勧む、我に独文科から宗教学科へ行けと。彼に目あり、有難く聞く。友よ、勤勉なる友よ、我は友の勤勉に驚く。しかして我が怠惰を愧(は)づ。神は我に絶大なる勤勉の力を与え給うを確信す。ああ我が神は大いなるかな。我が切に祈り願うところのものは、よろこんでこれをかし給う。しかして皆、信仰にともないてである。信仰、うすらげば、我がすべてはうすらぐ。信仰深く強くなりゆけば、我がすべては光に溢れて来る。こんな不思議なものがあるか。

ラジオはその原理を学理的に証明し得、しかし独り信仰のみはこれを学理的にも心理的にも真に証明するあたわず。信仰は信仰によって証しせらるるなり。

松濤に傘を貸した。彼は1里の遠路を帰り行く。彼に、願わくは光ののぞまんことを。

〔三畳の小室の詳細な見取り図のスケッチあり〕

○1925年5月16日（土）

晴。

「人もしキリストに在らば新たに造られたる者なり」（コリント後5・17）

『聖書の研究』5月号、待ちに待ちし良友来る。相変わらず内村先生から直接その音声をきくが如く、霊魂にひびきわたる如く感じて読んだ。ただどうも青線で従うより外ない。異見一つもあるなしか。どうしてこうまで先生の体験がこんな小さな僕にまでわかるんだろうと不思議な位よくわかってしまう。他なし。キリスト我に在ますが故である。キリスト彼の筆をうごかせり。キリスト我が眼をうごかせりである。小さき経験、考えから、普段、だんだんわかって来たことや、切に感じて居たことなどの、この書に見出ださるるは一つにキリストによるためである。しかしてまた、多く教えられて先生には、いつもの様に感謝して、はるかに御健康を祈りまつる次第である。

「近代人の愛と基督信者の愛」などは、そのうちに感想文にでも書こうか、書簡にでも書こうかなどと思っていたのに、先生に先んじられて、ややガッカリしたが、どうして、や

はり勿論、先生の観察その他すべての論旨は到底僕の及ぶところでない。大本にあやまりはないが。

道徳的観念の幼かりしときより強かりし我、（人格的）偉人（所謂英雄に非ず）崇拝に燃え、偉人の伝記を読むを最も好みし我は遂に、ただ言行の上の道徳にあらず、精神の根本にふれしむる道徳、宗教道徳、基督教道徳にまで至った。実に真理、正義、追求に切なりし幼きときよりの性格は、母上より享けたる最も貴き賜である。このことは誠に感謝に堪えぬところである。我、薄志弱行、優柔不断なりと云えども、神はこの弱きをたすけんためについに我を呼び給えり。真理、正義への心はついに行為をも支配す。何ぞおそれん、愚鈍、薄志弱行を。我に最大最高のもの存す。万事はこのもとにて。

○1925年5月17日（日）

雨。聖日。安息日に雨を降らしめ給うは近頃の聖旨の如くある。不信の徒に囲まるる我には感謝である。

昨日、青木の叔父様が来水された。12時40分着で。例の如く、自転車でお迎えに行った。昨夜は寝るのがおそかった。昼間、公園を御案内した。

敏速に読むこと、これは勉強の上に誠に大切なことである。ことに僕に於て然りとなす。注集と敏速、この良習慣を養わざれば大事はならぬ。どうも細密に亙りすぎて、一小部に没頭或は拘泥することが多い。それによって正確な知識を得ることは屢あるが、とかく大本がおるすになりやすくなる様に、少々のことをかまわず、大本をとらえてドンドン進捗することは僕に大切なことである。どうも一日になす分量が少ない。大体の予算（予定）にまで達せずして終ることが多い。英書に於てはさほど感ぜぬが、独逸語に於て切である。ウンと読んでやる。目をこやしてやる。語学は何にてもあれ毎日々々、連綿として続けてやらなければ駄目なもの。やっぱりこれもコツコツなることを要す。急速に成功せんとするはあやまりだが、グズグズもよくない。もう今日は、ガンバレ、あるのみ。

偉人を見よ、彼等は春風に吹かれて春の日にそだちたるや。決して然らず。彼等は厳冬、寒風にさらされて、磐石を通して根をはりたるものなり。彼等は高山、断崖に臨む松なり。見よ、机上のルッターを。彼の眼光、前額を。この鍛えは、水火をくぐりてなりし鉄のそれよもはげし。

安息日に、大洗へ皆で、叔父様お出でなので、散歩せんとせり。天候晴れやらず、逡巡す。我が心独りいたむ。

書に籠りて、主に午前を遊び暮らさんとするにあたり、深く謝す。祈り終りて見れば、霧雨ふり降りて、我等が足をとどむ。我、感謝に堪えず。彼等のために同情はするが。我が神に対しては、聖書と共に、はるかに藤井先生に従いて10時より2時間すごすことを得さしめ給いしことに対して、感謝せざるを得ざりき。祈りを聴き給いしならん。神、ゆる

し給いしのみならず、さらに雨によりて、静けく聖くおくることをゆるし給いしなり。今日の様な特別な場合のほかは、我、断然拒みて安息日を主の聖旨に従いて、おくりたいのである。マタイ伝18、19、20章。ローマ書5、6章。

ヒルティーの『眠られぬ夜のために』は実に良書である。ケーベル先生の愛読書たる、我は益々この書が愛らしい。ヒルティーとケーベルよ、敬する師にして愛する友よ。小さき我にも日々「力」をあたう。その力は何処より来るか。すべて「彼」より。感謝に憶う。

Für Schlaflose Nächte〔眠られぬ夜のために〕にあらず、Für hellen Morgen〔晴々する朝のために〕である。もし、泰ちゃんが、心ありてこの書を読まば、彼の不眠症は癒えることうたがいなしであると信ず。彼の心霊の救われんことを祈る。「求めよ、さらば与えられん」である。

三弦さんよ、千鶴代さんよ、皆さん、安息日の午前は主のことのために潔く、静かに落ちついてきよく送りませんか。人生の最大の歓び、意味はこの辺にあるのではないでしょうか。一日に何時となく、神が近づき給うことをつよく感ずることがないでしょうか。「近代人」のために、祈ることのいかに多きよ。我等は、神のためにこの使命を有す。我は職業なになるかを知らず。必ず傍（かたわら）、キリストのために人心霊のために用いらるべきものならん。

若き青年よ、汝は齢（よわい）22、
ああ前途洋々たる有為の青年よ、
汝は烈火の如く燃ゆる信仰に生きざるべからず。
春草の生々たる如く若々（わか）しくあれよ。
今は太平の世の如くして太平の世にあらず、
文明は放蕩の子を生めり、世は末なり。
心せよ、悪魔の奸計（かんけい）、甘言、魅力と虚偽に。
立てよ、主のため、正義と真理のために。
安息日、ああ歓び、雨のなかに。とくに歓びの安息日であった。強き力が流れこんで来た。
益々、主にすがりつつ。讃美歌246、301、181、連続して歌い、凱旋将軍の感がした。
青木の叔父様帰京さる。お見送りに行く。三弦さんと帰途、入浴す。夜は相変わらず聖書その他で。然り。9時のお祈りは切なりき。１９２５年3月22日の安息日以来、「安息日を聖く守るべし」を厳守している。感謝すべきかな、主のはたらき給う力の強きことよ。
北京の兄に倣いて。彼益々、我に在り。彼我なり、我彼なり。

○１９２５年5月18日（月）

曇。8時10分前、登校。グンデルト先生に質問をなす。先生は親切に教えてくださる。いよいよ忙しい。愉快である。感謝である。睡眠時間8時間と運動1時間あまりとを忘れなければ、あとはどんなに勉強したってヘタダルことは絶対にない。それは信頼して余り

あることである。食事、それは全部ゆだねてよい。滋養分のなんのと考えるに及ばず、神、飢えさせ給わざるなりである。今日から学校のノートの方もそろそろ着手する。

ああ、少なきかな、日々を真に神にゆだねまつり、神に導かれて歩む人の。人の頭も駄目である。口も駄目である。手も駄目である。神への真情これのみが人生を人生となすものである。人はいかにもあれ、汝は神に全霊を捧げまつれよ。ああ、信仰の真の友よ、世に此くの如き稀なるものはない。ああ、我と真に語るもの一人だにあるなし。我人を知らず、人我を知らず。しかれども、真のクリスチャンの心と心とは、識らざる間ながら神を通して語る。故に我、友なきにあらず。常人の有つ友より更にはるかに多くあり。幸なる哉、エホバによりて。この実験体験こそは、実に実に、基督者の特権なり、エホバによりて。我もまた。主なる神よ、爾の恵と力とは、ついにはかりしるべからず。すべての栄光、爾に帰して。ただ信仰、これ我が全部なり。

世の人は、信仰の人を指して云う、「あれは信者だ」。まるで人間の伍に列するあたわざる気狂か、変人か、用のないものか、嫌われものの様に。しかしてまたこの信者なる語は、一種異様の嫌なひびきをあたえるに於ては、我々、真に神を主と仰ぎて神愛に生きんとする（弱き真面目なる）人は、これほど変な感じを与えられることはない。我は彼等にあらゆる罵詈を浴びせて、神の前に、塵ほどもなき人間たることを切言してやることが出来る。しかしそれは我が心では毛頭ない。彼等もまた、神によらんことが最もとする願いである。ああ、あわれむ人々よ、我は彼等に、いかほどでもそしられ馬鹿にされ迫害され、蔑視され、指さされ、のけものにされん。主の道たれば、我これらのことを苦しと思わず、ただ彼等が神に帰らざるを見ることのみが最も苦しき涙のことなり。

不信、放埒な人々に貸金をしたときは、かえらぬものと思うより仕方がない。そんな金は価のないもの、塵だと思って、すてたように思えば、あやまりなしだ。しかし、それが母上から戴いたお金と思えば、悪いことをしたと思う。それよりも困っている人の役にたてるか、良書のためにか、更には、神への献金のために積んでおくべきだった。

吝嗇な人、金くさい人（今の人間に最も多い）、隠見な人、猜疑的な性質の人。打ちとけにくい冷たい人。こういう人に接するほど不愉快なことはない。不信の最好模範である。現代文明の産児、あわれむべき人よ。どうもこの頃の様に、世間の悪方面ばかり見えてはいやになる。これは一寸した感じであるが、我が内なる聖火はこれらによりても益々、燃えざるを得ない。

Jedem großen Fortschritt geht gewöhnlich eine Versuchung zur Verzweiflung voran und jedem großen Leiden eine ungewöhnliche innere Freudigkeit und Kraftempfin-dung, durch die uns Gott dazu stärken will. Ich bin nie so unglücklich gewesen als vor erheblichen Erfolgen, und so freudig und kräftig gestimmt als vor schwersten Leben-sereignissen. —— Hilty Für Schlaflose Nächte. 18.Mai

〔大きな内的進歩がなされる前には、つねに絶望への誘惑が先立ち、大きな苦難が訪れる前には、非常な内的喜びと力の感じが与えられるものだ。つまり、神はこれによって我々をその苦難に堪えうるほどに強めようとされるのである。私はすばらしい成功をおさめる前ほど不幸だったことはなく、また最も困難な出来事に出会う前ほど、喜ばしい、力づよい気分にみたされたことはなかった。――ヒルティー、『眠られぬ夜のために』5月18日（草間平作・大和邦太郎訳）〕

僕は今、丁度こんなことを痛切に感ずべき運命にあるのではないか。このことの深く、且つ感謝に溢れて体験さるべき日のあらんことを祈る。そして今までに小さいながらすこしは味わった気がするに、これから将に至らんとする大奮闘に対して、神に依る異常なる内心の充実、奮起、歓喜が溢れている。そしてまた、絶望への誘惑も一方、勃然として起こることもある。しかし、これはたしかに真理である。神よ、この大なる真理の体験を得せしめ給え。

○1925年5月19日（火）

晴。すべてを忘るべし。ただドイツ語に専心。汝、ドイツ語にありては一日の予定を終るまで寝ねるべからず。今に及びて怠れば救わるべきときなし。はげめ！　はげめ！　なまけもの！

我は人に要求されるより余計に払いて以て謝意を表せり。『新精神』（富永徳磨主筆）3月号、「神の子か救主か」を読んでガッカリした。奮然とした。しかし、人の信仰は人の信仰として仕方がないと思った。僕に於ては竟にかかる信仰で救われない。絶望である。自滅である。あまりに荷が重くてたおれてしまう。

主の十字架なくして僕の信仰はなくなってしまう。その根本の異なるを指摘されて、もう読む気がしなかった。もうこれから読むとしても「人の信仰はそれ」と見て、あっさり通読するよりほかに道が無い。信仰に関する項は、いやもう読むまい。それはかえって毒だ。それよりも、真剣に霊を籠めて読みたい本が沢山ある。母上様や平口様がこ信仰の上に歩まれるのでは！　これを思うと涙が流れそうである。深刻なる罪の重荷をどうしてくれるのであるか。最大の問題は罪である。罪の赦しなくて我々は如何に。キリストは完全なる人格――神格までへ――の手本なのであるか。たんにそんなものであるか。ああ、もうこんなことをエス様に対して書くさえおそろしい。やめる。

主よ、ゆるし給え。我は言うところを知らず、不遜をゆるし給え。ただ、主の知るべからざる、恩恵に感謝するものであります。アーメン。

○1925年5月20日（水）

晴。帰途、松濤と共に歩きつつ話す。彼、父を亡いて、ショックを受けたり。しかして彼、これによりてか、人生問題について更に深からんとす。まことによきことなり。かれ、「宗

教と社会」について頭をなやます。いかにして社会は救わるべきか。宗教は如何にして社会によくはたらきをなし、人霊を救わんか。その問題、如何。方法如何を之は深く考えるらしくあった。

かれの宗教とはなにか。すこぶる漠然としている。汎神教らしい。彼の宗教なるものに、真の力、実際生活に生きてはたらく真の歓びの力と云うものがあるいは欠けてやしないか。これを彼自身に照らして、僕は推測する。彼は真に救われている人か、残念ながら僕は然りと云い得ぬ。

ああ彼、真面目なる人よ。社会の堕落、腐敗を見てこれを救わんがために奮然と燃える人よ、汝の霊は貴し。しかれども、汝は自身に於て救われたる人なるや。絶大至高のもの汝をとらえたるや。歓喜と希望の光が真に汝の眼を射てあるや。感謝に祈りに。汝は平伏す事ありや。宗教はかく生きて生くる力に溢れざれば死せるものなり。宗教にして真の宗教にあらず。汝の願う、実際生活に最も密接なる宗教は之なり。しかしてこの宗教は現世に密接とは言いながら、来世に第一に密接なるものなり。その名を何と云う。我、基督教を措いて他に知らざるなり。

我は汝の願いの、企ての、ついに果を結ばざらんために泣く。しかし、我が信ずるところ、これは明らかなり、預言す。己が罪に泣かざるものはついに神を見るあたわず。基督者は第一に何であるか。罪に泣きて、神に呼ばるるものである。彼（基督者は）受身のものにして、己れに宗教を立てんとするものにあらず。

松濤よ、汝は罪に泣きしや、神にすがりしや。ここに僕と彼とは全然その出発点を異にしている。根本を異にしている。真の社会の救済は、その個々人の心霊の真の救済によって初めて完全となる。個々人の心霊は、これただの教義、何々主義、何々説とかいう様なものによりては救われず。各人、真に霊的に覚醒するに非ざれば救われず。

キリスト既に世に勝ち給えり。我はその僕としてはたらかん。社会の救わるると救われざると、その数に於て、結果に於て、我は顧みず。ただ、真の生命の人心に流れ入らんために、はたらかんのみ。キリスト教は、社会救済の直接の手段でもなんでもない。しかし、キリスト教にあらざれば、竟によき社会は永久に来らざるなり。社会に向かって、何々すべからずと怒鳴るを要せず、彼等に根本がたてられざる間は。

かく考え来りて、ああ、僕はやっぱり福音のために戦わざるを得ず。伝道は僕に与えられたる使命の一である。そして、全生涯は陰に陽に、これ福音のあかしにほかならざるなり。これこそ我が果たし得る唯一の使命にして、最大の使命である。あえて伝道界、宗教界と云うものに立つをねがわず、すべて聖旨のままに。ただ福音のための生涯、これのみ。

主よ、ついに私は主をはなれることの出来ないものとなりました。

主よ、このことが最も私の感謝し奉ることでございます。

主よ、願わくは、この罪人を、その栄光の日まで。

「われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。」（ロマ8・18）〔独文〕

○1925年5月21日（木）

風、曇。フットボールを猛烈にやった。やるからには1時間を最も有効にと思うことも念頭にある。しかして、興味も勿論ある。

ウィルヘルム・テルの第3幕第3場が終った。しかして之であとを、簡単に話して一まず終えたことにした。しかし、その自由の歌なる故に、特別に面白かった。こんどは何をやるんだろう。グンデルト先生の時間は有益である。和独の練習も必要だろうが、1週3時間のうち1時間それにあてられるのは僕にとっては面白くない。シラーとローエルの「テル」の詩をついでに読んで憶える。

聖書や宗教書類を読んでいると、つい学校の勉強を妨げる様になる。どうも、気持がよくなってたまらないので、つい離れることが出来なくなる。やっぱり、日課通りにまず学校の方をやっつけて、夜8時からこの方へかかることとしなければならない様だ。いい詩なんか見つけると、たまらなく、躍如として血がわき、眼が光り、厳然となることもあり、感謝に平伏すこともあり、歓びにその詩を高らかに、又は讃美歌などを歌いだすこともある。坐(い)ながらにしてこの快楽、何ぞ常人の如く外へ出で迷い、求めるの要あらんや。

……〔Tauler の独文省略〕……。

夜10時半、スコルピオ〔サソリ座〕の南天に起つを見る。彼の勇姿はある暗示の如く。

○1925年5月22日（金）

曇、雨、晴。昨夜、スコルピオの起り来るを見て、夏の近づけるを如実に感じた。どの星座よりもスコルピオの姿は一種力強きサジェスチョンを与える。両兄を左右に、僕を真中にして写した永久記念の写真（同心町の家の端縁）を見て、感慨無量である。

一粒の種、地に落ちざれば、救われなかったのか。ああ。彼は何処？　同心町6年間、彼と共に起臥(きが)してなお、救われざりし我が身の罪なりしことよ。しかれども、彼の愛は常にかわらざりき。彼は、来るべきときを待ち居たりき。高校時代（僕の）を待ち居りしならん。しかして彼の在北京中、我れ、第1回水高入学試験に失敗せり。彼の慰めは、

「人生、何ぞ此の如き失敗を数えんや」

と云うにありき。しかして翌年の入学を見ずして彼はこの世を去りぬ。彼に遺言なかりき。無言の遺言なりき。無量無限の沈黙の遺言なりき。

ああ、しかれども、いかなれば彼をかくもはやく召し給いしぞ、我が神よ。

神よ、御声を以て親しく語り給うの奇蹟をなし給わざるか。我れ、断腸のおもいなり。しかれども、しかれども、声はあり。声は確かにす。生々溌剌(はつらつ)、活気に溢れたる彼の「死」

の報をうけたりしかの日の我が胸は如何ばかりしぞ。外もまた雨の日なりき。我が呼吸は絶えんばかり。心臓の鼓動は止まらんばかりなりき。若し更に我れ気の弱き者なりしならば、あるいは気絶せしやも知れず。……回想の情勃然、涙。しかれども深き歓び彼と共に。

今日、哲学のノートをとっている最中、しみじみと基督教の偉大を感じた。凡そ、学校の時間でこれほど熱烈な感じを抱いた時間は稀である。ギリシヤ哲学よりカントまで（その知識はまだ何も知らぬ）。しかし結局、哲学も！と思った。

神、而も父なる神、在まさずして。キリスト（救主）イエス、しかして聖霊降臨なくして、我々は活きて居られるか。我と人類に生命があるか。弱きものよ、人類よ、何ぞ、小さき自個を主となすや、不信の世よ、悪魔の奴隷よ。何ぞ罪に泣きて神に帰らざる。

金が頭にコビリツイテトレザル、虚栄と虚偽が沁みこんでいる近代人の泥水に浸っている僕達（キリストに真にすがるもの）のいかに日常生活の苦しきことよ。しかれども、真の友の集まるところ（お集まり）のこれに反して如何に地上の楽園なることよ。我、日曜、かしこに集い得ざるを悲しむ。来るときを待つ。独り！　全く孤独！　而して、平安。人のおもいにすぐるものありて毎日を、感謝なり。アーメン。

Christ himself says to his disciples; ye shall do greater works than I ; I am but a little grain of mustard-seed;… (from Luther's Table-Talk,P.32)

〔キリスト自身、彼の使徒たちに言う、汝らは我よりも大いなる業をなすだろう。しかし我は一つの小さな芥子種であると……。（ルッターの卓上語録より）〕

Oh, my Brother in Heaven was a little grain of mustard-seed for me; I must be to him as the Disciples to Jesus Christ, our Lord. Yes! All is for Christ, for God! Amen.

〔ああ、天にいる兄上は私にとって一粒の芥子種であった。私は彼に対して、使徒たちが主イエス・キリストに対するようで在らねばならない。然り！　すべてはキリストのため、神のため。アーメン〕

「今われらは鏡をもて見るごとく見るところ朧（おぼろ）なり。然れど、かの時には顔を対（あわ）せて相見ん。今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。」（コリント前13・12）

○1925年5月23日（土）

晴。ああ、この世、我が周囲を見るとき、何を嘆じないで居られようか。嘆き、嘆きのみ。基督者！　もうただこの語を以ては容易に信をおけないときである。仮面をかぶれるものの何と多き世ぞ。悪魔の子等も、所謂基督者も（実は悪魔の子よりたちがわるいかも知れない）。ああ我その名をあぐるにおよばず。ただその人のために嘆き、痛く祈る。若し、真に信仰に立ち帰りて、信望愛の生活に入らば、我がよろこびや如何に。水戸の1年では到底！我が全生涯よ、そは人々のために。かかる人々のために。信仰なき、読書、その他あらゆ

る知識を追うこと、之、結局何でありますか。それは、信仰ありての労働――それがどんなにつまらぬものでも――に到底比ぶべくもなき価値なきもの、有害なものである。悪魔の子等よ（偽基督者も然り）！　汝等は滅亡の子なり。それ神は悪魔にすでに勝ち給いたればなり。

「イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。」（コリント前2・2）

ぐずぐずものの僕は（原因は如何にもあれ）もっともっとガンバラざるべからず。而して、ブラウンニングの確信を以て、我もまた奮然たり。

「倒るるは起たんが為、敗るるは更に能く戦わんが為、眠るは醒めんがため」

（彼、辞世の詩「アソランド」より、藤井先生の著書による）を以て、起たん。心とせん。来るべき戦によし敗るるとも。如何なる恥も忍びて我は更に備えん。然れども、神よ、若し赦し給わば、来るべき戦に勝たしめ給え。敗るるも勝つも主のためなる我が生涯に之何ぞ。主に、我が熱誠のあるあらば、主は必ず守り給わん。アーメン。

○1925年5月24日（日）

晴、雷雨、晴。「忘るるな5月24日」と同胞に残して煙と化したる同胞の悲痛の叫びを忘れたるか。同胞よ！　尼港残虐のありし日〔ニコラエフスク事件〕。

今日ほど安息日を終日、聖書と宗教書に没頭した日はあまりない。そして武田の叔母様に書簡を認めた。彼女（オバサマ）が本当に基督者になられんことを祈り上げるに切なるものである。お陶宮〔淘宮術は、1834年に横山丸三が創始した開運のための修養法で、人は生まれつきの癖を洗練することにより、淘げのできた心、すなわち本心が顕われ、生まれつきの運命を改善できるとし、気質の偏りを矯正して幸福な人生を過ごすよう修養する。（ウィキペディア）〕は宗教とは別のものであろう。しかし、何だか僕にはそれが純真な基督者には毫も要ないものの様な気がするが、その道をよく知らざるものの口を出すべきでないからやめる。叔母様は基督者的婦人である。真にキリスト彼女に宿らば如何ほど懐かわしきものならん。天に在ます高島伯母様が懐かしくある。そして彼女は僕と共に在ます。再会の日は必ずある。何がどうなろうとこれは確かなことである以上、僕は平安、歓喜に身の苦を知らぬ。預言者エレミヤよ、懐かしき人々よ、彼の如き人は我が最も敬愛する友の一人である。

藤井先生にお手紙を差し上げることの1週間遅れたのを残念に思う。山本の一同、母上様に差し上げる。平口様、富永先生によって救われたとのことであるが、あれで本当かしら。否、平口様の本当に変わられたことをしる。そして敬服する。しかし僕は、十字架、復活の信仰の彼女に真に受けられる時が来るならば、その日のために更に彼女のために祝福するものである。

Brixhan Coast〔ブリックハムの海岸線〕に 19.C'〔世紀〕中頃、ある夕、Henry Francis Lyte〔く

ンリー・フランシス・ライト」〕が涙を流して「彼」を慕いて、ついに迸り出でし Abide with me……〔主よともに宿りませ〕の讃美歌を、当時を偲びつつ一人しずかに歌いたるときの、また我が心のいかに聖地を憶い、彼を慕い、彼に祈りを捧げしことよ。

世の人よ、現世的享楽を見せつけよ。現世的財宝を見せつけよ。この世の智をふりまわせよ。来世的観念をけなし、無にし、しりぞけんとするあらゆる手段よ、我が前に来れ。我は、彼、独り、在ますが故に安らかなり、動かされじ。これほど動きなき安らかなる、歓喜なるものを汝はもっているか。汝等にはわからぬもの、それが我等には最もわかるものである。

○1925年5月25日（月）

晴。相変わらず感謝にして。略す。むさぼる者よ、むさぼれ。我は関せず。あまりに神のことが重大である。

○1925年5月26日（火）

晴天。

「来世なくば神なし。神なくば悪魔も地獄もなし。汝の死と共に万事は終る。然らば淫蕩、掠奪、殺人、其の他好むが儘を行うに如かず」（ルッター）

と。Worms 会議に於て皇帝に答えて曰く、

「私は聖書の証言によって或は明瞭な道理によって説破されない限り、何ごとも取り消し得ませんし、取り消そうとも欲いません。」〔独文〕

ああ、神に拠りて断乎として動かざる Luther よ。常に神と直接のお話をして絶大なる力に溢れ居りし Luther よ。この世の如何なる誘いも何の効なき Luther よ。キリストに在りてのみ在り得る Luther よ。ああ、神よ、願わくは小さき我もここに徹せんことを。

Cross〔十字架〕を仰ぎ瞻てのみ歩ましめ給え。おお、St.Paul〔聖パウロ〕よ。おお、M. Luther〔ルッター〕よ。この虫けらのために天国にて祈り給わんことを。アーメン。

○1925年5月27日（水）

晴後雨。一度、真面目に内的に全心が向けられるか。それはこの世で最も厳粛なるものと化し、神をしてそこに見さしむる敬虔にまで深み行く人。また一度、闊然として小児の如く天真爛漫にうちとけんか。何人も心をときて和せざるを得ざる諧謔たっぷりの人。それが本当に人間らしい人間。神様の最もよろこび給う人間ではないか。かの Lincoln〔リンカーン〕にその典型を見ると云ってもよいだろう。その外、宗教家に必ず多くあったことを確信する。宗教家とは基督者にして純真な人を意味したい。

我が兄上をその同心町同起臥の時代に於て回想するときに、僕はその小さい模範を見たことを言い得、彼を追憶し愛慕するの念深きを覚える。彼、今天に在り、しかして私と共

に親しく在り、我が中にさえ来る。幸なる哉との御声がする。我が母上も兄上も姉上も皆、僕の最も愛する人たるは言うまでもない。真に愛し得ることの出来る親と兄姉とを有する身の感謝なることよ。神よ、我が感謝は溢るるなり。ああ、

「我乏しきこと決してあらず、エホバ我が牧者なればなり」

アーメン。

雨降る。地震あり。かの数月前の関西山陰ことに城崎町付近の強震。彼等のために遠く悼む。

Luther の生涯によって見る如く、つくづく、人間は自身で無理な道を開いて行くものではないことを痛感する。そこに無理が出来るとき、また事前に無理を生ずる。現在のことに忠実なるとき、それの道は神様が自然に開いて下さる。その道こそ、疑いなき確かなものである。そこにたとえ無理、蹉跌、その他色々の不成功と見えることありとも、それは意に介すべきことではない。それは一時の自分の眼に映ずることであって、それが如何に成り行くかはわからない。それは神のみよくなし給う。そしてそれが最善の道なるを確信すべきである。その確信がないくらいなら、山へでも遁退するがいい。人生はそんなものではない。我等の知るべからざるもくろみが神にあるのである。かく信じて、人生ほど安康にして、感謝と歓喜にみちたものはない。いざ棹ささん、聖旨のまにまに。

そして、浅はかな経験ではあるが、確かにそのことを感ずる。それは自分の思いもかけぬ方へ、否、嫌厭していた方へさへ、神様は僕をつれて行かれる。そしてそれがやがて最もよき道であったことをあとで知ることさえある。雷光が直線に走らずに、非常な曲路をたどる様に、我が道も何れへか赴くことであろう。すべては聖旨の許にである。

○1925年5月28日（木）

終日雨。Wilhelm Tell〔ウィルヘルム・テル〕終りて、F. Hebbel〔フリードリヒ・ヘッベル〕の“Judith”〔ユディト記〕を教えて戴くことになった。今日の1時間により、系統立てる知識の必要を感じた。どうも僕はのろい。時間が早いつもりでゆっくりしていると知らぬまに寝るときがくる。これは決して瑣事ではない。これは僕にとって最大問題の一つたるを失わぬ。事を敏速に運ぶこと、以て時間の急迫を告げざらしめんこと。即ち、余裕のあらんこと。目下重要なこと。聖書を読むこと。否、これは永久に必要なり。而してこれは如何に少量といえども、今は読まざれば寝ること能わざるに至れり。これ蓋し日常の食糧の如く我にとりて必須なるものなり。即ち心が満足せざるなり。宗教書、讃美歌(日本語、英語)、独逸語の勉強。発表に拙なる僕（語学一般に）は一層発声して練習するを要す。

6月1日より第1学期試験勉強に着手せんとす。なにはともあれ、感謝するは主によりて送る基督者の日常生活である。ああ何と意義ある生活よ。かつて「意義ある生活を送らざるべからず」と称して、中学時代に道徳にのみ立ちて竟に、真の満足を得ず、且つ如何に努力するも忽ち敗れて元に帰らざるを得ざりしこと幾度なるかを知らざりし彼の時代を

思うとき、而して今日と比するとき、如何にそこに根本の相違あるかを認めて、驚きと感謝とに堪えぬわけである。あの貴き経験よ、この新生命よ。これはどなたから。それは２０００年の昔に与えられてあったのである。それを受けることの出来た幸よ。これを知らずして行く人々よ、ああその人々のために悲しむ。そのあまりに神に対して申し訳けのないことではないかと思うとき、神様は与え給うのである。人はただ心を以て受ければよいのである。現代人には、この単純がわからない。あまりに彼等は悧巧（りこう）である。彼等は文明の物がすきだ。彼等はあまりに悪魔がすきだ。滅亡がすきだ。

○1925年5月29日（金）

雨。もう梅雨期に入った様である。シトシトと降る梅雨と何等異なるところがない。

昼、学校へ行かんとするとき、郵便配達夫が来た。ひょっと僕のところへではないかと思って立ちどまった。果たして、それは僕にあてられた手紙であった。それは誰れからと云う予感ではなかった。ただどうも来そうだなと思ったにすぎなかった。差出人が無名であった。そして「親展」と記されてあった。サテと思って次の瞬間には「八木様」だなと閃いた。果然そうであった。書面に、

「……駒沢で御目にかかれた事は私にとっても深い喜びでした。単なる偶然でない様に思われます。……」

誠に有難く読んだ。そして、筆の執られなかったことの世間なみの御無沙汰でないことは僕は、よくわかっている。それは御忙しい御身であることが一つ。それから、恐らく僕の如き者のためには、返信には及ばず（これは僕の方からの考）、かえって、お祈りのとき僕のためにもなされることを、以て返事のかわりとされることの必ずあることを暗に知る――否、信ずる――次第である。それが本当の返信である友誼である。おやくめ位なら、返事と云うものはいらないわけのものである。むしろ、お返事を今日いただいたことを恐縮の至りと感ずる。

帰宅後、机に向かいて、宇宙とは何だ?と思った。身体がかたまってしまう様に力を全身、全脳にみなぎらしめて考えた。色々のことが、それからそれと考えられて来た。そして結局、我々人類は未だそれを解決する能力を付与されていないことを知った（そこに祈りがあった）。即ち、人智の小にして小なることを知った。そしてまた、宇宙何ぞや?の解決は時に俟たざるべからざるを知った。そしてまた、人類のこの時に対抗し、耐え行くべからざるものなることも知った。即ち、人の体力の如何に貧にして弱なるかを知った。即ち、人智力、体力の如何に小なるかを知った。

学術の発達、進歩、之まことによし。体育研究之もよし。之等、あらゆる方面の進展の能力は即ち、人間の与えられたる賜である。しかれども更に大なる貴きものが一つある。それは、人の霊である。一種特別なものである。これあるが故に、人は生きている。これなければ到底、

この社会、国家、世界というものはできない。しかれどもその霊、不完全なるが故に、闘争……とあらゆる罪悪がある。霊、弱きが故に、智に迷わされて罪悪におちいる。我々人間の存在の意義、永生獲得はただこの霊によりてなされる。探求慾、知られざるものを知らんとする活力を与えられた人間が何ぞや?という最大のフラーゲ〔問い〕として、無限の神秘に向かって尋ね行くはよし。大いにやるべし。しかし、宇宙何ぞやは、我々人間が主観、主体たる以上、遂に我々の知覚、認識し得る宇宙は何ぞやとなり、即ちまた、人生何ぞやと、問題は一歩近くなってくるのである。宇宙を客観的に考えると云いてついにまた主観的にならざるを得ぬ。それは、考えるもの、人が主体にしてその外に主体なきによる。人生何ぞや。しかして、またついに神に帰らざれば、已むこととなる。

かく、人間、最貴の霊性の欲求にたちかえりて、神を仰がざればやむに至りて、智力の力をおもい、霊性の不完全を思って、ますます人生問題は仰ぐこと、信ずること、即ち信仰によってのみ、見えざれども満足を得られ、見えざれども見えざるうちにて解決が望まれて、結局に基督者の信仰に来らざるを得なかった。

「聖霊我等の弱きをしりて言い難き嘆きを以て我等のために祈り給う」（ローマ書8・26）

ああ、人間よ、人間よ、神は愛を以て、人間は本当の人間たることを要求し給うた。而して要求し給う。愛し給えり、而して今も愛し給う。

ああ、ここまで考え考え、祈りつつ来ること、実に1時間半を要した。これはしかし、短い時間であった。一時は基督教を疑わんとさえ思った。その瞬間は、言われぬ不安、さびしみを感じた。1時間半の戦の後、あたたかき神にさらにつよく抱かるるの感がして讃美歌を歌わざるを得なかった。

僕が祈ったり、宗教書を読んだり、考えたりしたあとで、どうしても讃美歌を唱わざるを得なくなって、何時と時におかまいなしに、突然しかも必ずしも1番からといわず、3番だけでも、2番だけでもうたいだしたり、ときには繰り返したり、英語でうたったり、するのを聞いていたら、さぞ変に人は思うだろう。しかし僕はそんなことはおかまいなしである。神様が近く近くいらっしゃれば、この世のことなんかそっちのけで、お話ししたり、歌ったりするのである。み光（虚栄）だのなんだのと云って作っている人の空（カラッポ）があわれっぽくなるのである。

またしても神様、こんなに感謝に満たして下さいまして有難うございます。毎日々々こんなにすごさせて戴いて、他の人のために、こんどは十字架を負うの更に深き恩恵なるを更に々々知らしめ給え。アーメン。

○1925年5月30日（土）

曇。今日も曇ったり雨だったりであった。兄上の同心町時代の生活を思った。彼は高等

学校3年の時は既に信仰は深くあった。聖書が――それは今僕が手許にもっているこの聖書である――常に机上にあったことを憶えている。そして毎日、どんな日でも必ずある一定の時間に読まれた。そして頁は着々と進んで行った、実に堅実な歩みを以て。以て兄上の熱烈なる一端をうかがった。僕には、それを一字でものぞいて見ようという気はなかった。『旧約十年』『研究十年』『断想十年』等という本が本箱の最上段に置かれてあったことも今浮かんでくる。馬鹿な僕には何のことでかわからず、またそれを読んで見ようとも思わなかった。第一、キリストなる語は妙な感じを与えていたから。

それを思うと、今の僕の心の状態――丁度それは兄上の彼の時に酷似していると思う――を察し得る人の居ないのも無理はない。そして、一種の悪感を以て敬遠されるのも無理はないかも知れない。クリスチャンの苦しみの一つもここにある。そこで基督者は――勿論、真正の基督者、直接のキリストの者、所謂現代の多くの基督者はその数に入らぬ――その日常のレーベン〔生活〕に於て、そのあかしたらざるべからずである。読書の基督者に非ず、思索内容の基督者にあらず、言葉の基督者に非ず、善行の基督者にあらず、在る（ビー）ところの生ける基督者たることである。

そしてまた、快活な生命に満ちていた兄上のデイリー・ライフを思うとき、いかに我もあの如くと願わざるを得ようか。一方に於て、たしかに規則的なる生活はこの内心の活性を助けるものなるを思う。それももとは規則を作って、それにしばられてやるのでなく、己れからその規則をいさぎよく敢行して行くことである。10時となると兄上はパッタリ、書を閉じて、さっさと寝たものである。これは単に精神的によきばかりにあらず。時間、精力の経済であること、実験によりて知る。兄上は、いやしく眼がパッチリ開いて働いている間に、ノラクラな時間というものは一分ともない様であった。見る眼も心持よく、事はかたづけられて行く。さらば、我も勇み立たん。兄上が我が前身か、僕が兄上の後身か、兄上を完全に僕の内に認識し得る僕は敢然として為さざるべからず。

夜、武田の叔母様へ手紙を差し上げる。

○1925年5月31日（日）

晴。午前、マタイ伝第26章、ローマ書。小室独り聖なり。はるか、内村先生、藤井先生のお集まりに従いつつ水戸にて独り。午後、学校へ。水中と水高1年との仕合、水中の勝。それから、富山のところへ行って2時間ほど快談。帰宅。夜、藤井先生へ御手紙と献金をする。先生の御誌『旧約と新約』60号6月号を以て満5年となるので、よき月を迎えるにあたりて。

第3学年になってからの8回目の聖日である。第1回、4月12日は即ち復活祭で藤井先生の御宅で。第5回目、5月10日（佳節）も上京して先生のお集まりで。あとの6回は水戸で、聖を守りて来りし聖日であった。我がこの世の宿り終るまで、すべての聖日を聖日としておくらんことを切に祈り、将来を祝福する。

然り、3年！　1921年9月22日より1922年、1年間はいまだ夢醒めず、彷徨の時。1923年に入るや、東天白み初め、ややその紅をみとむ。春、復活祭に近づくにしたがい、俄然、旭日の燦然たるを望み、我が新生への一大光明を認めたり。歓喜と感謝とは如何ばかりしぞ。それは目白の家へ引き越してからのことであった。兄の新家庭が結ばれ、目白の家が建てられたとき、同心町の家に働き下されし母上はこの時、肉眼を失明されて、おなじく光明を仰ぎ初め給いき。母上のために熱祷ありき。このときが即ち大手町に山上の垂訓をうかがいに行ったときで、これに勝る我が歓びは遂になかりき。1923年、1年はかなり信仰にあゆんだが、行に本当にあらわれてこなかった。未だ未だであった。

1924年にややうすらぎたる時もありき。果然、病を得て、第1学期を休む。夏休後は非常に深められて、決然として水戸へ来り、勉め勉めて、幸にして及第をするを得たり。

1925年春、一段と深み行くを感じたり。これ、また藤井先生のお集まりに行きて更に。近頃、兄上の今までにまして近きことをおぼえ、その歓びは、彼この世には在らざれども、実にキリストによらざればである。